

[原著論文：査読付]

スポーツ国際大会の視聴実態と関心に関する分析  
－大学生を調査対象として

吉松 孝\*

**Analysis of viewing status and interest in international sports  
tournaments  
-Survey targeting university students**

Takashi YOSHIMATSU\*

**Abstract**

This study is a follow-up study on university students' TV watching and interest in international sports tournaments, using the 2023 Men's Volleyball World Cup and Rugby World Cup as research materials. In addition to the survey results for the soccer World Cup and baseball WBC, viewing levels for the four tournaments were compared and trends in interest were analyzed. As a result, viewership rates for the Volleyball World Cup and Rugby World Cup were significantly lower than those for the Soccer World Cup and Baseball WBC. The final matches of both the Volleyball World Cup and Rugby World Cup had high viewership rates, with rugby in particular being particularly high. Regarding the media used, over 85% of students watched volleyball on TV, while about 70% watched rugby on TV, with a higher percentage of students who watched rugby using the Internet. The correlation coefficient for volleyball and rugby and the correlation coefficient for soccer and baseball both had a weak positive correlation.

**KEY WORDS** : Volleyball, Rugby, TV, correlation coefficient, media

## 1. 背景

### 1.1 日本におけるスポーツの国際大会

筆者はこれまでの調査で、大学生のスポーツ人気のトレンドを理解するため、日本のA大学の学生のW杯とWBCの放送視聴数を比較し、大学生の両大会への視聴や利用メディアの違いの傾向を示した<sup>1</sup>。視聴者の関心と人気度、メディアの露出と報道、ナショナルチームの活躍などの点から、サッカーW杯と野球のWBC<sup>2</sup>は、日本国内でも広く放映されてきた。

また、2023年は、9月から10月にかけて、サッカー、野球に続く形での人気の国際大会であるバレーボール・ワールドカップ（兼パリ五輪予選）、ラグビーW

杯<sup>3</sup>など、五輪以外のスポーツ国際大会も立て続けに開催された。バレーボール・ワールドカップとラグビーW杯の日本チームの戦績を表1、表2に示す。バレーボール・ワールドカップは、初戦、2戦目と世界ランキングでは下位のチームに対し、フルセットまでもつれ込んだ。初戦は5セット目を奪いフィンランドを破ったが、エジプトには接戦で敗れ、五輪出場権獲得に黄信号が灯った。しかし、3戦目のチュニジア戦以降、ストレート勝利を続け、10月7日には、「ストレート勝ちすれば五輪出場権獲得」という条件の中でスロベニアにストレート勝ちし、五輪出場を決めた。最終戦は、既に五輪出場権を獲得していたアメリカ<sup>4</sup>との対戦となったが、フルセットの末、敗れた。

Table1: Japan men's national team's results in the Volleyball

FIVB パリ五輪予選ワールドカップバレー・日本戦(大会開催期間:2023年9月30日-2023年10月8日)					
日時	試合開始	試合カテゴリー	対戦相手	スコア	備考
9/30(土)	19:25	パリ五輪予選・プールB	フィンランド	○3-2	
10/1(日)	19:25	パリ五輪予選・プールB	エジプト	●2-3	
10/3(火)	19:25	パリ五輪予選・プールB	チュニジア	○3-0	
10/4(水)	19:25	パリ五輪予選・プールB	トルコ	○3-0	
10/6(金)	19:25	パリ五輪予選・プールB	セルビア	○3-0	
10/7(土)	19:25	パリ五輪予選・プールB	スロベニア	○3-0	五輪出場権獲得決定
10/8(日)	19:25	パリ五輪予選・プールB	アメリカ	●2-3	

ラグビー日本代表は、初戦のチリ戦で快勝し、予選突破へ幸先の良いスタートとなった。しかし、2戦目のイングランド戦で、力の差を見せつけられる形となった。サモア戦は接戦となったが、6点差で勝利し、勝

ち越した。予選最終戦は勝利すれば決勝トーナメントへ進出するという試合であったが、序盤からリードを許す展開となり敗戦し、予選リーグでの敗退となった。

Table2: Japan national team's results in the Rugby World Cup

ラグビーW杯・日本戦(大会開催期間:2023年9月8日-2023年10月29日)					
日時	試合開始	試合カテゴリー	対戦相手	スコア	備考
9/10(日)	20:00	予選・プールD	チリ	○42-12	
9/18(月)	4:00	予選・プールD	イングランド	●12-34	
9/29(金)	4:00	予選・プールD	サモア	○28-22	
10/8(日)	20:00	予選・プールD	アルゼンチン	●27-39	予選敗退決定

参考として、2022年サッカーW杯と2023年野球WBCの日本チームの戦績を表3、表4に示す。サッカーは予選リーグをドイツ、スペインという競合を破り、2

勝1敗で通過したものの、ラウンド16でクロアチアにPK戦で敗れた。野球は、予選の日本ラウンドから決勝のアメリカラウンドまで7連勝で優勝を果たした。

<sup>1</sup> 2023年4月-5月にA大学で調査用紙記入による調査を行い、本稿執筆時点では、調査結果を日本感性工学会論文誌に投稿中である。

<sup>2</sup> メディア業界では、スポーツ単独競技の「二大大会」とも呼ばれる。両大会とも五輪同様4年に1度開催されるが、五輪は複数の競技の集積であるため、スポーツ単独競技の大会からは除外される。

<sup>3</sup> 他メディアでの表記を参考に、本稿では、調査対象とする各大会を基本的にサッカーW杯、野球WBC、バレーボール・ワールドカップ、ラグビーW杯と表記する。

<sup>4</sup> 本稿執筆時点では、アメリカは世界ランキング2位であった。

Table3:Baseball WBC results of the Japanese national

サッカーW杯・日本戦(大会開催期間:2022年11月20日-年12月18日)					
日時	試合開始	試合カテゴリー	対戦相手	スコア	備考
11/23(水祝)	22:00	予選(グループE)	ドイツ	○2-1	
11/27(日)	19:00	予選(グループE)	コスタリカ	●0-1	
12/1(木)	4:00	予選(グループE)	スペイン	○2-1	
12/6(火)	0:00	ラウンド16	クロアチア	●1-1	PK戦1-3

Table4:Japan national team's results in the FIFA World Cup

野球 WBC・日本戦(大会開催期間:2023年3月8日-年3月22日)					
日時	試合開始	試合カテゴリー	対戦相手	スコア	備考
3/9(木)	19:00	予選1次ラウンド	中国	○8-1	
3/10(金)	19:00	予選1次ラウンド	韓国	○13-4	
3/11(土)	19:00	予選1次ラウンド	チェコ	○10-2	
3/12(日)	19:00	予選1次ラウンド	オーストラリア	○7-1	
3/16(木)	19:00	準々決勝	イタリア	○9-3	
3/21(火)	8:00	準決勝	メキシコ	○6-5	9回サヨナラ
3/22(水)	8:00	決勝	アメリカ	○3-2	

## 1.2 先行研究

スポーツイベントとテレビメディア、視聴率との関係などについて調べた先行研究を表5に示す。スポーツイベントとテレビメディアとの関わりや歴史について述べた研究はあるが、大学生を対象を絞った国際的なスポーツ大会の視聴程度や、人気の比率や差異につ

いて示した研究はない。しかし、視聴率調査では測れない大学生のスポーツへの関心を把握することで、広告業界や制作会社などがメディア・プロモーション手段の参考にできるため、大学生を調査対象とした調査には意味が生まれる。

Table5:Previous research on sports events and television media

研究者(発行年)	研究の内容
須藤(2005)	メディアとスポーツの関連性について、メディアの経営戦略や、スポーツに対する独占的な囲い込み、スポーツビジネスの関わりという視点から分析した。
永田(2014)	日本でのスポーツ関連産業を、利益創出の仕組み作り、顧客関係管理、企業と顧客とのリレーションシップの密度という視点から分析した。
中村(2023)	日本でのサッカーW杯の注目度を背景として、現在のスポーツやスポーツビジネスが抱える様々な課題や問題点、スポーツビジネスの今後の展望について述べた。
高井(2001)	高校野球中継と「本当らしさ」について分析した。「本当らしさ」を「文化的本当らしさ」と「ジャンルの本当らしさ」に分類し、中継視聴者の心構えについて考察した。
加藤ほか(2009)	テレビのスポーツ中継における映像の質について、映像テクノロジーの開発という視点も踏まえ、考察を行った。
是永(2012)	中継の主体をなす実況・解説の発言に対する批判としてなされる場合が見られることを背景に、スポーツ中継での、実況者や解説者の放送中の言説を中心とした表現行為を公正さや中立性などの視点から分析した。
鬼丸(2005)	メディアスポーツ論を、言説分析と映像分析とともに行った。メディアスポーツ論にとっての映像理論、映像分析の方法論についての考察を行った。
村川ほか(1974)	1964年東京五輪、1968年メキシコ五輪、1972年ミュンヘン五輪のテレビ視聴率などから各五輪の比較を行い、スポーツ振興に果たすテレビの役割を検討した。
竹田ほか(1994)	大学生、専門学校生を対象とした質問紙調査を行い、スポーツ中継への視聴者の視聴動機を明らかにした。学生の男女の区別での動機の性差の傾向を示した。
湯沢ほか(2017)	サッカー、プロレス、プロ野球、テニス、バレーボールなどのスポーツ種目の特性に注目し、中継番組の種目による視聴行動の差異を性差や年齢などの視点から検討した。

### 1.3 以前の調査結果から

筆者がこれまでにサッカー W杯と野球WBCを材料として行った調査では、「サッカー W杯と野球WBCの視聴数や視聴ポイントでは、W杯が有意差を持ってWBCを上回り、W杯の方が野球WBCよりも人気を得ていた」「両大会ともテレビでの視聴が多数を占めたものの、サッカーは、インターネットを利用しての視聴割合が高かった」という結果を提示した。そのうえで、これらの結果や方法については、他競技の調査に応用できるのではないかと示した。

## 2. 目的

前章で述べた背景から、本稿は、国際スポーツ大会の視聴や関心に関する後続の研究として、2023年に実施されたバレーボール・ワールドカップ、ラグビーW杯の2大会を調査材料とし、大学生の視聴実態や関心の程度、利用メディアの傾向を把握することを目的とする。

そのため、これまで筆者が行ってきた二大会の調査結果に、バレーボール・ワールドカップ（男子）<sup>5</sup>、ラグビー W杯を加えて考察する。結果は、各競技における代表性の高い大会として、各種競技の視聴度合を数値の指標として示すことができる。

## 3. 方法

### 3.1 調査用紙の内容とポイント集計法の設定

A大学2-4年を対象に、調査用紙記入<sup>6</sup>による調査を実施した（調査時期は2023年10月）<sup>7</sup>。配布、回収した調査紙は124枚で、有効回答数は122枚（N=122）

であった。質問項目は、2023年のバレーボール・ワールドカップ（男子）、2023年のラグビー W杯の各試合（野球7試合、サッカー 4試合）について、a「全部見た」、b「少し見た」、c「見ていない」という3択の選択肢を用意<sup>8</sup>し、「全部見た」「少し見た」と答えた回答者には、「テレビ放送で見た」「インターネット放送（TVer, FOD, J-sports, Amazon-prime）で見た」「その他」という選択肢を設定した。

数値についてはRWとPEという2種類の集計を用いた。RWとPEの算出方法と示す内容については、表6に示した。RW（Rate of people who Watched at least a little）は「少しでも見たどうか」の判断基準で、調査用紙の選択肢「全部見た」と「少し見た」を足し（表にはWatch（=W）、「見ていない」をNo Watch（=NW）と表記する）、Nの総計で割ることで、「（少しでも）視聴した人の割合」を測った。PE（Points by Event）は「視聴した際の濃度」を表すための数値であり、「全部見た」を2点、「少し見た」を1点、「見ていない」を0点とし、「全部見た」×2+「少し見た」×1を算出した。また、メディア利用については、「テレビ放送で見た」「インターネット放送（各サイト）で見た」は、各1ポイントとした<sup>10</sup>。

### 3.2 調査対象試合

調査の対象とした試合は、2023年9月から10月に開催されたバレーボール・ワールドカップのうち、10月4日トルコ戦（4戦目）、10月6日セルビア戦（5戦目）、10月7日スロベニア戦（6戦目）、8日アメリカ戦（最終7戦目）の4試合と、2023年9月から10月に開催されたラグビー W杯の9月10日チリ戦（初戦）。9月18日イングランド戦（2戦目）、9月29日サモア戦（3戦目）、

Table6: Calculation method of RW and PE and what RW and PE indicate

	RW	PE
由来(英語)	Rate of people who Watched at least a little	Points by Event
算出方法	「全部見た」と「少し見た」を足し、Nの総計で割る。	「全部見た」を2点、「少し見た」を1点、「見ていない」を0点とし、「全部見た」×2+「少し見た」×1とした。
示す内容	(少しでも)視聴した人の割合	視聴した際の濃度

<sup>5</sup> バレーボール・ワールドカップは、女子男子ともに開催されたが、今年、特に飛躍が注目された男子バレーのみを研究対象とした。

<sup>6</sup> 調査用紙の回答に矛盾が生じないように、被験者に説明を行った。また、属性や個人情報などが特定、漏洩されないように厳重に管理した。

<sup>7</sup> 本研究の調査は、「人間・動物を対象とした実験を含まない研究」の倫理的配慮に基づいて、研究対象者に研究目的を説明し、自由意思で研究の同意を得ており、さら

に、研究対象者の個人情報とは特定されない。

<sup>8</sup> 放送から調査開始までの期間での忘却可能性を勘案し、感想や理由などの定性的な質問を排除し、「見たか、見ていないか」といった単純な「有無」で答えが出る質問を配置した。

<sup>9</sup> 筆者が研究実施にあたって設定した。

<sup>10</sup> 回答者が1つの質問に対し複数の選択肢を選んでいる場合は按分した（2箇所を選んでいる場合0.5ポイントずつとした）。

Table7:Trends in the number of viewers (N, NW) and RW from the men's volleyball match against Turkey (4th match) to the USA match (final match)

④対トルコ			⑤対セルビア			⑥対スロベニア			⑦対アメリカ			RW 平均		
W	RW	NW	W	RW	NW	W	RW	NW	W	RW	NW	W	RW	NW
33	26.4%	92	29	23.2%	96	27	21.6%	98	38	30.4%	87	31.8	25.4%	93.3

Table8:Changes in the number of viewers (N, NW) and RW from the rugby match against Chile (first match) to the match against Argentina (4th match)

①対チリ			②対イングランド			③対サモア			④対アルゼンチン			RW 平均		
W	RW	NW	W	RW	NW	W	RW	NW	W	RW	NW	W	RW	NW
16	12.8%	109	16	12.8%	109	15	12.0%	110	27	21.6%	98	18.5	14.8%	106.5

10月8日アルゼンチン戦（4戦目）で、各試合のREとPEを算出する<sup>11</sup>。そのうえで、バレーボール・ワールドカップとラグビーW杯の相関係数を示し、バレーボールとラグビーの一人当たりのPEを足した平均値、最頻値、中央値、ポイント0.0（両大会通じて1試合も全く見ていない無関心層：U.G）<sup>12</sup>の人数を算出した。

## 4. 結果

### 4.1 RWとPEの種目ごとの比較

バレーボール・ワールドカップ、ラグビーW杯のRWとPEの数値を表7、表8に示す。バレーボールのRWはトルコ戦で26.4%を記録するものの、セルビア戦から数値を下げ、最終アメリカ戦で30.4%となった。ラグビーは、チリ戦、イングランド戦、サモア戦が12%近くで推移するが、予選突破がなかったアルゼンチン戦では21.6%と最高値を記録した。

そのうえで、これまでのサッカーW杯、野球WBCを加えた調査対象試合の全試合平均RWとPEを表9に示す。全試合平均値とともに、サッカー、野球、バレーボール、ラグビーの順になり、RW、PEともポイント平均値では、3位バレーボールと2位野球では2倍近くポイントが離れ、最上位サッカーの数値は最下位ラグ

ビーの4倍となった。また、バレーボール、ラグビーの種目別平均のREは、バレーボールが25.4%、ラグビーは14.8%となった。

### 4.2 利用メディアについての結果

バレーボール・ワールドカップを視聴した学生と、ラグビーW杯を視聴した学生が、それぞれ、どのメディアを使用して視聴したかについて、表10、表11に示す<sup>13</sup>。バレーボール・ワールドカップをテレビで視聴した割合は85%を越えた（インターネットは約14%）のに対し、ラグビーW杯をテレビで視聴した割合は約70%（インターネットは30%越え）で、ラグビーW杯視聴学生の方が有意差をつけて<sup>14</sup>、インターネットを使用する割合が高かった。

## 5. 考察

考察にあたり、サッカーW杯と野球WBCの視聴の散布図と近似曲線を図1に、バレーボール・ワールドカップとラグビーW杯の視聴の散布図と近似曲線を図2に示す<sup>15</sup>。

サッカーと野球の視聴の相関係数は0.3459と弱い正の相関関係であるが、バレーボールとラグビー視聴の相関係数は0.2421で、さらに相関関係は弱くなって

<sup>11</sup> バレーボール・ワールドカップは調査用紙紙面スペースの都合上、対象を7試合ではなく4試合に絞った。

<sup>12</sup> どちらの試合も「全く見ていない」を示す指数で、筆者が研究実施にあたって設定した。本稿では「U.G：無関心層（uninterested group）」と呼ぶ。

<sup>13</sup> バレーボール・ワールドカップでは、TVer、FODを合計した値を表右列の「インターネット」とし、ラグビーW

杯では、TVer、J-sports、amazonを合計した値を表右列の「インターネット」とした。したがって、表10、表11ともに、「テレビ」と「インターネット」の項の部分の和が100%となる。

<sup>14</sup> 有意水準を0.05として $\chi^2$ 検定を行った結果、p値が0.0000006<0.05となり、バレーボールとラグビーの間に有意差が確認された。

<sup>15</sup> 図1、図2内の直線は近似曲線である。

Table9: Average values of RW and PE in 4 tournaments

ポイント平均値	バレーボール	ラグビー	サッカー	野球
1 戦目(バレー、野球)RW	調査実施せず			62.2%
2 戦目(バレー、野球)RW	調査実施せず			61.2%
3 戦目(バレー、野球)RW	調査実施せず			53.2%
4 戦目(ラグビー、サッカー初戦)RW	26.4%	12.8%	69.6%	51.6%
5 戦目(ラグビー、サッカー2 戦目)RW	23.2%	12.8%	61.9%	55.8%
6 戦目(ラグビー、サッカー2 戦目)RW	21.6%	12.0%	67.9%	64.3%
最終戦 RW	30.4%	21.6%	67.6%	74.3%
調査対象全試合平均 RW	25.4%	14.8%	66.7%	60.4%
調査対象全試合 PE 平均値 (PE 総数/試合数)	0.3668	0.2111	0.8942	0.7253

いる<sup>16</sup>。また、今回の調査では、バレーボール・ワールドカップのRW、PEともサッカー W杯、野球WBCに及ばないことが示されたが、一方で、リーグ戦の中で鍵を握る4戦目のトルコ戦でのRWの高さや最終戦のアメリカ戦でのRWが30%を越えるなど、試合の重要性との連動性や関心が一定程度示された。一方、ラグビー W杯は、初戦から3戦目までがRWが予選最終選のアルゼンチン戦でRWが21.6%となるなど、注目度が予選突破に向けて大きく高まり、当該試合が持つ大会上の位置づけに反応した形となった。

テレビを、幅広い年齢層、性別での視聴者層が見込めるという点で「大衆性の強いメディア」、インターネットを、見たい人が限定されて能動的に視聴する「専門性の強いメディア」と解釈するならば、テレビで視聴した割合が85%を越えたバレーボールの方が、テレビでの視聴が約70%となったラグビーより大衆性が高いといえる。しかし、ラグビーもかつての注目度に比べ、テレビでの視聴が70%を確保しているという点からすると、大会そのものが大学生には根付きつつあるとも考えられる。

また、両競技通じてのポイント0.0（無関心層：U.G.）にも注目したい。サッカー&野球では、U.G.(0.00)が34人と最頻値で、有効回答数（N=312）の10.9%を占めた（ポイント4.00=17人、平均値=2.01、中央値=2.11）。一方、バレー&ラグビーでは、U.G.は61人で最頻値であり、有効回答数（N=122）の50%となった（ポイント4.00=2人、平均値=0.56、中央値=0.25）と極めて低い数値で、バレーボール・ワールドカップもラグビー W杯も全く見ていないという学生が約半数いるということが示された。

以前であれば、「家にテレビがない」といった理由での「見ていない」という選択も想定されるところではあるが、本研究で調査対象とした4大会についてはインターネットでも同時生配信されており、大学生へのスマートフォンの普及率を考慮すれば、各大学生が視聴できる環境にはあったといえる。特にサッカー W杯やラグビー W杯など、日本人にとっての一部の試合の放送時間帯の不便さを差し引いても、U.G.については「スポーツへの関心が薄い」と考えられる。

Table10: Volleyball World Cup Viewing Media Used by Students

テレビ	TVer	FOD	インターネット
85.9%	12.8%	1.3%	14.1%

Table 11: Rugby World Cup viewing media used by students

テレビ	TVer	J-sports	amazon	インターネット
69.0%	4.1%	26.9%	0.0%	31.0%

<sup>16</sup> バレーボール&サッカー等といった形で相関係数が算出できないのは、調査対象の学生が異なるためである。

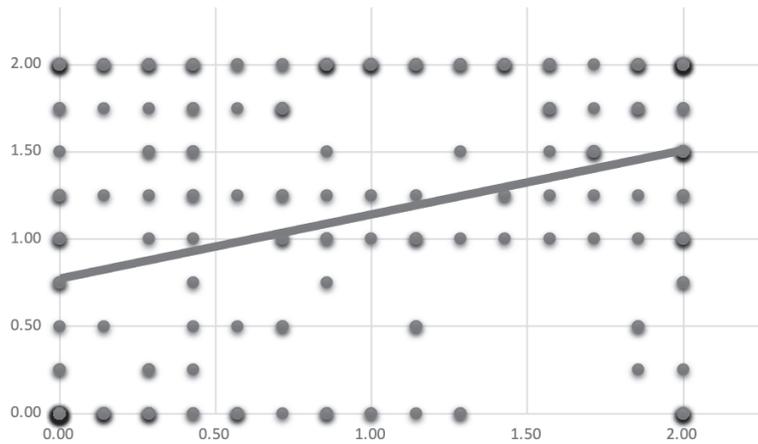


Figure1:Scatter plot and approximate curve of soccer World Cup and baseball WBC viewing

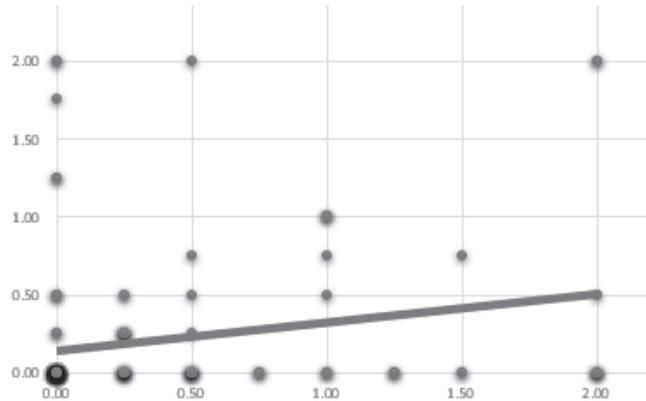


Figure2:Scatter plot and trendline of viewing of Volleyball World Cup and Rugby World Cup

## 6. まとめ

本稿は、大学生の国際スポーツ大会の視聴や関心に関する後続の研究として、2023年に実施されたバレーボール・ワールドカップ、ラグビーW杯の2大会を調査材料として、これまで筆者が行ってきたサッカーW杯、野球WBCの調査結果に加え、4つの大会の視聴度合を比較し、関心の傾向について分析した。調査を経て、「バレーボール・ワールドカップ、ラグビーW杯の視聴割合は、サッカーW杯、野球WBCを大きく下回った」「バレーボール・ワールドカップとラグビーW杯では、バレーボールの方が、視聴度合が約1.72倍高かった」「バレーボール・ワールドカップとラグビーW杯では、どちらも最終戦が、視聴割合が高く、特に、ラグビーに関しては突出して高かった」「バレー&ラグビーの相関係数と、サッカー&野球の相関係

数は、ともに弱い正の相関関係にあった」「利用メディアでは、バレーボールをテレビで視聴した割合は85%を越えたのに対し、ラグビーをテレビで視聴した割合は約70%だった」などの結果が得られた。

## 7. 研究の限界と今後の方向性

本研究の限界として、以下の点が挙げられる。調査対象が、A大学という特定の大学1校であることから、視聴率調査と比べた場合、母集団の性質に偏りが出る。調査に使用した放送コンテンツが4種類の競技であるとはいえ、曜日や時間帯、放送局の違いという条件の違いが存在するため、単純に比較することには限界が生じる。質問紙の質問項目を細分化し、詳細に設定することも可能ではあったが、今回の調査では、細分化した場合に、両競技とも開催から調査までの時間経過

により、調査対象の学生が「忘れてしまった」など選択できない状況に陥るリスクがあった。また、分母の学年やN数にばらつきがあるため、今後の調査では、他大学への調査実施の検討も含め、できる限り開催から調査実施までの時期を近づけ、「その大会の放送をなぜ見たか」などの理由についての定性的な調査を実施していきたい。

## 引用文献

- 1) 須藤春夫：スポーツとメディアの融合-スポーツコンテンツの問題性，スポーツ社会学研究，13巻，pp.23-37，2005.
- 2) 永田靖，(2014)：スポーツビジネスにおけるCRMの重要性-顧客リレーションシップによる満足度の向上，広島経済大学経済研究論集，第37巻第3号，pp.43-50.
- 3) 中村聡宏，(2023)：スポーツビジネスの今と未来を考える-勝ち以上の価値をもたらす治道家とスポーツマンシップ，千葉商科大学紀要，pp.31-38.
- 4) 高井昌史，(2001)：メディアの中のスポーツと視聴者の意味付与-高校野球を事例として，スポーツ社会学研究，9巻，pp.94-105.
- 5) 加藤朋之，徳良 智子，(2009)：テレビが語るスポーツ映像のゆくえ，山梨学院大学経営情報学論集巻，pp.149-154.
- 6) 是永論，(2012)：メディア上の表現行為をどのように分析・評価するか：スポーツ実況放送を事例に，日本マス・コミュニケーション学会2012年度秋季研究発表会，pp.1-6.
- 7) 鬼丸正明，(2005)：メディアスポーツと映像分析-予備的考察，一橋大学スポーツ研究24，pp.13-20.
- 8) 村川俊彦，深町明夫，長谷川修，(1974)：TVスポーツ番組視聴率に見るスポーツ嗜好第2報-オリンピック放送視聴率を中心に，日本体育学会第25回大会，p.197.
- 9) 竹田隆行，池田勝，原田宗彦，(1994)：スポーツ中継の視聴動機に関する研究，日本体育学会第45回大会，p.374.
- 10) 湯沢恒人，鈴木守，古屋正俊，(2017)：テレビ・スポーツ番組の視聴行動に関する研究(2)-種目別にみる視聴者像について，日本体育学会第36回大会，p.145.